Title	石川三四郎における歴史意識の基底 : 第二次大戦後の米国政権
Author(s)	稲田, 敦子
Citation	聖学院大学論叢, 7(2): 1-12
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=666
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

石川三四郎における歴史意識の基底

——エドワード・カーペンターとの接点をめぐって——

稲　田　敦　子

The Foundation of Historical Awareness in Sanshirō Ishikawa:

A Comparative Study on Contacts with Edward Carpenter

Atsuko INADA

"History only depicts the self through intervention between both subject and the present. The problem lies, therefore, in the method of intervention." At the basis of the historical awareness expressed in these words is an attitude of critical questioning into the problem of principle in the relationship between the self and the other and into the conditions that regulate those relationships. The period in which Sanshirō Ishikawa was strengthening his interest in history and in which he published his manuscript on this subject was one that embraced the early years of Shōwa era, a time when Japan was embarking on the path toward war. He bore up under his "winter of discontent," never losing his perspective of "illumination from within." His attitude of excluding "arbitrariness from without" and depending on "strength from within" is connected with the criticism of fundamental thinking that led to the superficial thought dominant in that era. It is here, however, that the influence of Edward Carpenter must not be overlooked. The awareness of crisis seen in Carpenter arises from a duality between social conditions in periods of transition and the danger of extreme imbalance and ultimate polarization between individual and social ethics under such conditions.

This paper investigates Ishikawa's historical awareness and seeks to explore the intellectual congruence between Ishikawa and Carpenter in the duality of problem awareness. The problem awareness they shared is in an as yet unsystematized stage with regard to confirming the position of the self in the understanding of society as a whole and with regard to the problematic nature of attaining that understanding. A search for clues to a solution is attempted, however, by incorporating nature into the perspective. On the basis of an idea of a state of harmony between original nature and social nature, this paper seeks to derive a policy for recovering the totality of human nature.

Key words; Edward Carpenter, Historical Awareness, Nature, Pacifism, Sanshiro Ishikawa

はじめに

「歴史は，主体と現在の両方の干渉を通じてしか自分を描き出さない。だから問題は，干渉の仕方にある」[1]という歴史認識の基底には，自己と他者との関係性の原理的な問題と，その規制条件を批判的に問う姿勢がある。石川三四郎が歴史的関心を強め，その論稿を発表したのは，昭和初期の戦時体制に入る時期であった。石川は，極めて緊張した社会情勢のもとで，彼の個人誌である『ディナミック』（1929年11月～1934年10月）誌上に，自らが関心を強めた歴史観および今後の展望を掲載した。その論稿は1933年に『歴史哲学序論』としてまとめられ，戦後1951年に復刻されることとなる。彼は，若年ながら1903年11月に発刊された週刊『平民新聞』に携わって以来，独自な思想形成とその展開により，思想的な一系譜におさまることなく[2]，「冬の時代」を耐え，昭和のファシズム期においても強権に対する抵抗を「内側から照らす」視座を失うことはなかった。

主体の内面的自由の追求と「場」における相対的自由追求とが具体的に交っていくところは歴史である。主体の内面的自由追求の過程を内面的時間と呼ぶならば，この内面的時間を歴史の中に内在化させ，自らの「時間」をもってそこに参与する作業が，接点への志向であり，状況によっては，この志向が抵抗の姿勢につながっていく。戦時体制に集約化された天皇制下では，この「思想」の解体が道行したが，それは，自己の内部にあるいわば「内面的時間」を維持することを絶った主体確立の弱さを示すものである。

「日本の思想の弱さは，状況次第でくるくる変わる流氷性にあるのだが，思想にとって重要なことは，単に状況判断や，さらには視覚が変らないということにあるのではないであろう。重要なのは，視覚を状況に応じて変えてゆく場合にも，その底を貫いて，価値意識と従って又一定の思惟方法が一貫していることである。だから『変転』のワクには限度がある。思想の堕落は，そのワクを外す点にある」[3]という指摘は，石川の思想に逆照射される。そこに見られる基底的連続性は何に由来するのであろうか。「外からの恣意性」を排除して「内在的な力」に依拠する態度は，「基底」的思想による時代の支配的「表層」的思想の批判に連らなるが，そこには，エドワード・カーペンターの影響が見逃せない。

カーペンターに見られた危機意識は，転換期における社会状況に対するものと，その状況下における個人倫理と社会倫理が極めて不均衡なまま，二極化していくことに対する危惧との二重性から成っている。彼は，「社会民主連盟」に参加し，機関誌 Justice の創刊に資金援助もするが，組織内の対立と分裂をきっかけとして連盟から離れ，新しい Fellowship of the New Life という組織を支える中で，彼独自の“new life”の展望を求め，内在的価値および変革主体形成の問題を模索していったのである。本稿は，石川における歴史意識の検討をすすめる中で，両者の思想的接点，この二重の問題意識から検討することを課題とする。

1 『歴史哲学序論』

石川による『歴史哲学序論』は三部構成になっており，第一編　歴史学総論・歴史理論，第二編　進化思想および進歩思想批判，第三編　史的階級闘争論および弁証法的唯物史観批判である。彼は，特に明治期以来導入されたスペンサー流の社会進化説を俎上にのせて，一方的な発展段階説の「硬化」した歴史観を批判の対象とした。

第一編では，まず「歴史観は人生百般の問題を解決する主要な鍵である。歴史哲学は，その歴史観構成の基礎工作である。社会問題を解決し，社会改革の方途を開拓し，理想社会建設の基礎を樹立するには，先づ正確な歴史哲学の創成から始めなければならない。」(4)と本書の目的を序に掲げ，「歴史は一種の科学になりつつある。歴史現象の科学的研究こそ，正しい正確な歴史観を成立せしめる所以である。然るに三十年来，わが国には所謂マルクス主義の歴史学－弁証法的唯物史観－が大いに流行し，半可通の，または陳腐・硬化の歴史観が弘通している。」(5)として，弁証法的唯物史観を批判の対象とする形で，当時の状況においては，直接的には表明しえない皇国史観を攻撃対象とする射程に入れていたのである。

当時の時代状況の下で，石川が目指したものは，歴史を「動態」的に認識し，その「多様性」を把握することであった。歴史事実の多元性を認識することが，基底に位置されることになる。それが「吾々の認識は必然的に相対的である」とした認識の相対性に通じることになるのである。ここでは，歴史現象の多様性は二側面から規定されている。つまり地理的環境による多様性と時代による多様性であり，具体的なあり方は，歴史科学の本質として，規則性と自由性が挙げられている。歴史科学は人類生活の変遷途上に現われる歴史的諸事件を科学的に認識し，その諸事件の外的運行ならびに内的関連を解明することを目的とするものであって，「実在の特殊の事実から出発し，その同じ特殊の事実を以て精確に終局する。」(6)この実在世界の各々の特殊現象は，無限数の要因の，一定時期における「共働」の結果である。この要因に本質的なものとして，石川は自由意思の存在を強調した。すなわち，任意的決定に心理の占める内的規制の諸条件に応合はするが，それは決して外界事件のように，原因的系列に還元され得ないものであって，自発作用の形を以て現われ，新しい原因的系列を始めるのである。

よって，外的世界および内的世界に於ける諸事件の一般的規則性や，それが運行する仮定の一般的形式等は，歴史においては「一種の予測」に他ならないのである。それ故，歴史が描写する世界に於ては，こうした規則性の代わりに，偶然および自由意思の原因性が支配するとした。このように把握された歴史の中には，「普遍的歴史法則」は存在しない。よって，歴史の「絶対的定式」を作り上げることは全く不必要なことになるのであった。しかし，時代は，それぞれに固有のまとまりとしての全体的特質を明らかにしており，それを把握し，その諸原因を発見し，更にそれらの諸

要因の形成を決定した「諸勢力」にまでさかのぼる「歴史的解説」の観点の重要性は指摘されている。ここで石川は，発展そのもの，進歩そのものを否定しているのでは決してなく，それが一方的な「規則性」に組み込まれるのを拒否したのである。

2 「地方的小リズムの振子動」の認識

ある事件が「歴史的である程度」はその作用の広汎さと緊張とに従って定まる。それと同時にその選択は，また相対的でしかあり得ず，常に「歴史探求者」の主観的要素を含むものである。歴史意識の位相を「一方において歴史的生起の個体性を意識すること。そして他方においてそれら生起した諸事実に『意味』を賦与すること」[(7)]というこの両面においてとらえるならば，この意味賦与とは，歴史現象に価値的批判を与えることとして，重要な役割をはたすことになる。その際の判断は「特定の事件乃至諸事件の連鎖が，その時代を越えて『永遠の相の下に』何を語りかけている」かを見極めることが第一であるが，それは，「歴史探求者」が同時代の状況に対してする価値判断を自らが自覚的に把握し，諸事実と「思想的に対応」することによって，可能となるのである。

この歴史現象の価値的批判の「標準」として，石川は，いわゆる歴史的価値と「社会生理的価値」を分け，その観点の違いを次のように明らかにする。すなわち，ある事象が有するいわゆる歴史的価値の程度は，それが次の歴史現象の要因として，いかなる「強度」，如何なる「廣度」を有するかによって定まるのである。他方，「社会生理的又は病理的価値」は，「社会生理」から見れば無価値であるばかりか，無価値を「存する」ともいえるが，その事実が「歴史進化」に与える直接的な影響，および各時代，各文化の個性とを正確に認識するには，この二観点からの諸事象批判の競合が必要条件となるのである。

ここで，石川が，「社会病理」および「社会生理」といっているのは，それぞれ，社会における「病状」および「健康状態」を指し，「病理学的状態」とは，「常態にある生物の各現象に固有な，そして或いは高等な或いは下等な変化の限界の単なる延長」[(8)]であるとみなされていた。そして現在の社会の病原は機械産業または分業性そのものではなくて，その所有権を握り，強権の保護をうける個々の細胞組織としての資本家および権力家にあるとした。ここでは，たんなる機構の問題ではなく「機構を組成」する「細胞」の問題として，歴史事実の病理学的批判を行う必要性を説いたのである。

よって，「純粋に人類的なこの新しい宇宙に於ては，歴史の研究は，もはや往昔の如く，諸事件の変遷を自分の都合にて変更するところの軌跡の神の干渉を含まず，又かの普通の人間の外に置かれ，自己の才能によって尋常事の仮定に服従することを免れる或る伝説的人物をも含まない。」[(9)]ものであると考えた。そして，個々の「細胞」への視点は，社会の「病理的」側面における強権の「細胞」組織に対抗しうるものとして，歴史的時代の発端より以来，絶えず拡大されて来た「振子

動」における小「細胞」にも向けられることになる。

それは，大なる「振子動」のリズムに混合して来た「地方的小リズム」の「振子動」への視点に連らなっていくものである。このことは，彼が政党批判を行った際の基底にあった視点の延長線上にあるものであり，変革運動の「裾野」を内発的に広げていくことによって，新しい歴史の担い手を，この「地方的小リズム」の中に見い出したのである。すなわち「諸都市の最も下層な生活の更替を継承して，もっと一般的な国民の振子動，それから世界的の大動揺が続き，同一運動に於て地球全体とその民族とを振動せしめる」[10]ことを目指す志向のあらわれであった。

しかも，この「振子動」で重要なことは，「かくて週廻また再週廻とその広さが拡大される」間に，「外の鼓動は逆の方向に成立して各個自ら発意の中心」となり，「その生活を，都市や，国民や，世界やのより広き社会と調和的に規則だてる」ことだった。石川が，「細胞」の「病理学的状況」を問題にする時，「細胞」が組織として強権に結びつくことによる「疾病」現象を指してはいたが，それに対置するものとしてこの「疾病」を回復させるものは，決してあらたな「細胞」組織ではなく，個々の「細胞」の内発的な力だと見做したのである。その力の相互的な連帯組織については，社会観にみられる複式網状組織の形をとり，相互作用を強化していくのである。この意味において，「社会はアリストテレスの言ふやうに無数の意味に於て『巨人』である。併しながら，この巨人は，現在の瞬間の『デリケートな吟味』（ゴビノオ）や，個々の人物の種々細密な分解によらねば，自ら了解されないもの」[11]であるという認識のもとに，各個人の「覚醒の度」が，「その時代の自由と健全の尺度」であるという歴史意識に連なるに至る。

「人間の社会的生活の変化は非常に迅速に行はれる。こうした事実は，進歩思想，進化思想によって助成せられ，そして其迅速なる社会変成の勢は，遡って又進化思想を裏書することになる。是れは人間の社会生活に時代の思想が與へる影響の如何に大なるかを證明するものである。」[12]との認識のもとで，このような状況に対する今日の諸国に流行する社会改造運動を批判の対象とした。その「多くは此外面的平面的の目論見に過ぎない」のであり，彼はこうした帰結を生む進化論を否定することにより，歴史の動的変遷の中で，その動的状態，運動をそれぞれ把握しつつ，個体の内的革新を求めていくこととなる。

この個体の内的革新への志向には，生命的創造論が内包されている。この創造論を論拠として石川が行った唯物弁証法批判は，第一に，生命の創造的発展を無視する点。第二に，生命ことに人生に存する幻影錯覚の重大な作用を無視する点。第三に，生命の最重要性たる保守的原理を説明し得ない，という三点であった。生命は大小種類を問わず，自己固有の意想（イデー）を実現拡充するために活動を開始する力，念力（イデー・フォルス）をもっており，生命は自己固有の意想を実現することに価値を感じ，そのためにあくまで闘うものである。ここに自由の要求がおこってくるのである。

さらに，石川は自らの問題意識を自己内部と社会状況へと複眼的にむけていたから，生命の輝く

光明のかげにある幻影，無明を人間社会においても認識していた。そのことが進化論からくる手放しの進歩主義への批判ともなったのである。そして，「各時代の個人生活を検討しその社会機構にたいする心理的交渉を明確に知る必要がある。単に経済組織の変遷を所謂『進化』的に羅列したのでは歴史にはならない。歴史事実の生理的，病理的批判――その中には要全道義的，審美的批判がふくまれる――を経た上でなければ生きた歴史を把握したとは言へない。」[13]と主張するに至る。

石川が，「歴史哲学の完成」として「歴史事実の多元性」の認識と，「歴史動態の多様性」の把握の重要性をあげていることは，生命の現象そのものが多元的存在の現われであり，「無限の中に営まれる連帯的生活の現われである。」という認識から発せられたものである。よって，「複雑な人間歴史を考察するには，従って常に内外より来る多種多数の原動力と，その錯節せる連帯関係とが集合して一切の事実を進展させるものであることを忘れてはならない。」[14]ことが強調されることになる。ここでは，まだ未完成ながら，個々人，各文化における多様性を認めて，歴史を立体的に把握しようとする試みがみられる。彼は，「進化」そのものを否定しているのではなく，むしろ進歩－運動を世界のあらゆる存在，あらゆる次元に認め，世界の多次元的運動の実相に迫ることを試みた。そのことにより，狭い意味での歴史のレベルを越え出て，人間と自然を含む世界の存在構造を把握しようとしたのである。

3　基底的批判原理としての「自然」

歴史意識は，一方では「歴史的個体への感覚を中心とする精神能力」[15]として主体の論理における個体意識を明確に持ちながら，他方，それがいかなる「現実形態としてあらわれるにせよ『普遍的』なもの――『神』，『民族』，『国家』等――の媒介なくしては成立しえない」[16]という，この普遍とそれに対する個体の緊張関係より生起する。

カーペンターと石川の共通の問題意識は，社会の総体把握とその問題性の中での自己の位置確認をめぐって，まだ未整理の段階ではあるが，自然を射程に組み込むことにより，解決の糸口を探ろうとするものである。言い変えれば，「人間的自然」の全体性の回復を，「本来的自然」「社会的自然」との調和的状態において成立させる方策を求めようとしたということであろう[17]。普遍理念の登場は，それの担い手としての自由な個人の主体的な形成を要請する。共同体的な規制や上下関係などの外的束縛を断ち切る個人である。しかし，この自由な個人も，彼の存在を支えている構造としての階級，民族国家，資本主義世界システムからは自由ではない。このシステムが発展し，その高度化することによって，それまでの生活基盤は解体され，肥大化した社会関係の中で特殊化した状況に封じ込められ，人間の現実的存在感は，希薄となっていく。カーペンターは，この希薄化をめぐる危機状況を強く意識した。特にイギリス資本主義の「構造転換」に連動して，労働の存在構造も転換を余儀なくされた中で，民衆運動が展開されていくが，その運動論をめぐる抗争も激しく

なる時期でもあった。この時期に，極めて文学的な形で，主体の問題をとりあげ，「自我の実現」「人格の完成」は，一個人だけにかかわらず，他我を意識し，各々が他者を彼自身における目的として認め，彼をそのような者として取り扱う意思をもつ人々の間にのみ社会は存在するものであると主張した。

その主著である Towards Democracy を「視点を打ち立てるよりも個人的接触を見出そうとする書」であると，E. ルイスは評したが，これは，この著がカーペンターの思想的出発点として彼の生涯の姿勢をすでに明確に示していたことの正確な指摘となっている。この書の主題は，人間存在の精神的基礎としての協同性をめぐる 'spiritual democracy' であり，そこには，「個人の人格の普通の原型を越える領域」が組みこまれていた。「死すべき運命からの完全な自由――それに名状しがたい静穏と喜悦とが伴った。私のなかに存在する自我のこの領域が，他人にも同じように（必ずしも自覚的ではないにせよ）存在していることが，私にはすぐわかった。むしろそのように感じた。……そこですべてが出会い，すべてが真に平等となる領域が開かれたのだ。」[18]という極めて主観的な表現が詩的特質をもつ散文形式にこめられている。論理的に整理された形で提起されているわけではないが，その内容を大別すると，一「人間的自然」の回復，二 対他者との調和＝協同的「関係」を対自然との調和の「場」において成立させようとする試み，三 固有価値論の三点にまとめられる。彼には，「唯物的で俗悪な民主主義」を精神的に昇華させることによって，「政治一般と最深部で関係づけ」る志向が強く見られるが[19]，ここに開かれた領域は，社会関係における「機能－役割」的関係から「実体－人格」的関係への再生の可能性をさぐる試みの一つと考えられるものである。

第一点と第二点は相関関係を持つものであり，切り離しては考えられない。自我は他我を意識し，より良き状態を自らと共有する者と考えることによって意識的人間は，あらゆる人における同じような要求を承認することが大切であって，その実現をはかる場が「大地[20]」を組込んだ「地上のミレニアム[21]」となるのである。社会は個人による相互承認に基礎をおいている。さらには，他者との協同関係を自然を組み込んだ協同の「場」において実践させていこうとするカーペンターの意図は，1889年に出版された Civilization; Its Couse and Cure にまとめられていた。そこに示された近代文明批判の検討は別稿[22]にゆずるが，彼は文明的規模における危機を，「調和の喪失」また「統一の喪失」であると指摘し，その視点を個的状況と社会構造の両側面に向けていた。人間の現実的存在感・全体感からの遊離の一方で，「量的思考」の拡大再生産を自己規制する現実的また質的な歯止めを提示できないまま事態が進行していく結果，「個別科学」がその理性的次元において「相互の連関と統一」の契機を放棄し，「全体性」と「現実科学としての実質」を喪失していく過程は，そのままにそれを支える思想一般が全体性・現実性を喪失していく過程でもあり，「社会の危機」「資本主義社会の頽廃の徴候」を反映する「文化の危機」を生む過程でもある[23]。この過程状況において，カーペンターは，「人間的自然」の全体性の回復を「本来的自然」および「社会的自

然」との調和的状態において成立させることをめざしたのである。

第三にあげられた固有価値論をめぐる問題は，主体の問題にあわせて，文明の個性的継承の視点から地域の個性と内発的発展および地域の固有価値を相互に活かし合う発想に展開されていくものである。固有価値とは，「何らかの物がもっている，生を支える絶対的な力である。一定の品質と重さの一束の小麦は，その中に身体にとって本質的なものを持続的に支える測定の可能な力をもっている。また一立方フィートのきれいな空気は体温を持続的に支える確固とした力」[24]をもつものである。物の内在的な性質を強調することは，その性質が他の物にはない一種の「個性」であることを顕在化させることである。物の個性およびその多様化は，人間が自然科学の知識を応用して物の固有性を活かす力量が発達するほど分業が多様化され，物の個性の選択の可能性は拡大される。そこでは，「すべてのものが，その内在的価値（their intrinsic worth）に従って評価されるし，いかなるものもその費用や稀少性のゆえにのみ評価されることはないし，また，いかなる種類の流行も存在する余地はないだろう。」[25]この固有価値をめぐる個性と多様性の問題は，内発性の問題とともに，地域への裾野を広げ，「地方の振り子動」の活性化への契機となるものであって，石川とカーペンターとの接点として果たした役割は大きい。

「相関的運動といふことは（吸引，反撥，引力，化学的混合，といふやうな諸語にて暗示せられた如く）無機的自然の基礎事実である如く思われる。そして又，これが『生』の基礎根源でもあるやうに思はれる。原形質の膠質はその隣の物質の方に，または反対の方に動く，そして之がその根原的性質でもあるやうに見える。最も原始的な細胞有機体は之と同様に作動する。或るものは光を求め，他のものは之を避ける。草履虫属は徐々に酸素を追求してアルカリを逃避する。アクチノフリスは澱粉に吸収されるといふ如き即ち是である。……全自然は運動である。最も原始的な生にありても，その隣接物体の刺激によりて運動するの『傾向』を有する。」[26]ここでは，静的自然観は捨消され，いわば「能動的」自然観ともいうべき志向がみられる。

「自然」には，その読み下し方にも表われるように，「自（おの）ずから然（しか）る」という存在そのものの理と，「自（みずか）ら然る」という自己実現への意志・努力という両義性がある。そして，「生命のルール」の認識と実践（実現）とが，人間が「自ずから然る」ために要求されてくることになる[27]。石川における基底的な自然観を基盤とした「土民生活」思想では，変革主体としての「土民」と，直接生産に携わる「生活」レベルでの実践活動を通して，自己の「内」と「外」における変革論が考えられていた。「土民生活」思想に関しては，限られた本稿での詳述は避けるが，この主張は，1920年11月に，亡命生活からの帰国後最初の講演で示されたもので，カーペンターからの示唆も認めつつ，石川自身が自伝でも言及しているように，幕藩体制下の安藤昌益の思想潮流に連なるものである。

安藤昌益の『刊本・自然真営道』および『稿本・自然真営道』は，医師昌益による医書の範疇を超え，厳しい危機意識に支えられて，「人ノ邪欲・妄強ノ悪念ヨリ発リ，災難ト為リ，人ニ当リ，

飢饉・疫死ノ患，絶ズ。皆，人ヨリ発リ，人ニ帰ス」（『統道真伝五　万国巻』）と示されるように，人間の根源的なあり方を考え直す思弁的な思索となっている。特に『稿本・自然真営道　大序巻』に見られる記述にあるように，東北地方などの飢饉をめぐる危機状況に立ち向かう課題をかかえ，現実には，『刊本・事前真営道』の序文に，門弟静良軒確仙によって世間の医師たちへの批判が載せられ，彼等が自然の「妙序」を知らず，「自然ノ気行ニ違ルコト」を改めないままに医術を行うことによって，人々の救済が果たされない現状が指摘されているが，こうした状況の中での課題を，人々の生き方の問題として考えぬくところに成立したものである。

「人ハ転定ナレバ則チ此ノ転定ノ外有リト為テモ，又転定也。無シト為テモ転定也。故ニ有リト為ルモ無シト為ルモ吾ガ侭ニシテ自由也。故ニ有リト為ルモ無シト為ルモ自由故，自由也。吾ガ然スル事ニハ，自然故，何カ成ルト云ヘバ，自ガ成ル也。此レ自然自成也。自然ニハ自然成ル也」（『統道真伝四　禽獣巻』）このことは，転定は人間であり，人間は転定であり，転定と殻と人間の生成においては，一体性と相互性があるということである。それは「自（ひと）リ然（す）ル」が故に自立しているのである。「自由」という語には，「ワレニヨル」というルビが付されているが，「自然真営道」とは，転定の自然にしたがって直耕を営む「ワレトスル」自立した生の様式のことであり，それが「自由」なのであるとされた。

しかし，「直耕」によって幕藩体制下の「法世」を「自然世」に変革していく主体的契機が昌益には見られない。石川は，この主体的契機に関して，「土民」という語の復権をはかり，理念型とすることによって，さらに「複式網状組織」により「自然」をも組込んだ新たな社会システムを形成していくことを目指した。これは，昌益の問題を内的に発展させた形でその思想潮流に連なったといえよう。この潮流は「劣等性と周縁性の諸次元のなかから核心的な部分をとりだし，それに決定的な位置を与えて，時代の文化と価値の序列を顚倒しようとする果敢なたたかい」[28]を生み，カーペンターとの接点ともなるのである。

4　むすびにかえて

世界システムが発展し，その網の目が密になればなるほど，個人は人格としての徳性を奪われる。人格とは歴史的に一回かぎり，その人かぎりの経験の統合として形成されるものであるが，システムの命令に一方的に従って，手引書どおりに行動する行動様式からは，経験は個人にではなく，システムの側に蓄積される[29]。石川にとって，批判すべき時代状況は，たんに軍国主義化や国粋主義的潮流にとどまらず，その背後にある現代機械文明と，それによって侵されつつある自然的秩序であって，その視点は戦中・戦後を貫いて，現代にまで有効な射程をもっている。このことは，時代状況を超越し，状況に左右されない「自立自存」の思考的根拠と方法を求め続けていこうとしたことを示すものといえよう。これは，「作為」に対する「自然」としてあらゆる関係の総括原理と捉

えようとしているものである。

石川は，その翻訳にもあたったクロポトキンの『新しき時代』の中で，「建設的および破壊的な諸勢力の自由活動は，諸勢力間の最も持続的な均衡を現はすところの事物を自ら創成する。そして若しそれに調和があるとして，その調和はこれ等の諸勢力の合成に過ぎない。」としているが，その論拠としては，強引ながらパスツールによる細菌作用に示される生命継承の自然的結果，つまり，地球の表面に有機物質の破壊と合成とが完全な均衡を保持しているのが細菌作用によっているということを挙げている。この論拠は説得性をもつとは思えないが，しかしここでの主張の中心は，この調和と秩序が，「神の意思から生れたものではない。現在の一勢力が課した法律から生れたものでもない。それは唯一の条件によってのみ維持される。同一點の上に動く總勢力間に自由に均衡が成立するといふ条件によってのみ維持される。――總ては合成しその合成せる總ては持続的諸事物を創成し，そして，その作為する總ての無限小の諸勢力の間に，また，その全一體を成す為に密集せる總ての個性の間に，緊密な連帯関係を構成する。」[30]ということだった。ここでは，「無限小の諸勢力」および構成要素としての個性における自由の尊重と相互間の連帯を強調しているが，その運動としての具体化は，自主自立による相互扶助組織運動であり，その影響が大きくみられるのである。こうした試みは，進歩思想が中心を占めていた啓蒙史観の中にあって，啓蒙史観の中心概念，特に自由，平等，正義そして進歩の意味内容を変換し，その適用場面を拡大し，それらの社会的機能を方向転換させることとなり，その意味で歴史哲学に新生面を切り開いたものなのである。

注

(1) 久野収『権威主義国家の中で』（筑摩書房，1976年）p. 89

(2) 石川の思想的出発点は日露非戦論であるが，その後，「伝道の時代」という状況認識を強く意識することにより，1906年８月『新紀元』紙上に「堺兄に与えて政党を論ず」を掲載し，組織自体の強権志向に対して警告を発した。また政党活動をすることへの疑問を提示し，「伝道の生命」にかかわる主体の問題を前面に出すことによって，堺利彦の申し出を「謝絶」した。このことを契機とし，さらに独自の思想形成を行い，どの思想潮流にも距離を保つこととなる。思想の水脈としては，幕藩体制下の安藤昌益の潮流に連なると言える。

臼井吉見は，自著の歴史小説『安曇野』の登場人物について，その何百人の中から一番敬愛する人は誰かと訊かれれば，石川三四郎を選ぶと述べている。それは，二つの闘いを貫いた石川の姿勢によっている。石川は，「外なる社会の不合理と闘うということ」と「内なる自分と闘うということ，自分の内なる“無明”と闘うという」二つの闘いを命を終える瞬間までやりぬく存在であり，特に「自分の内なる無明と闘うこと，これをやり抜くことこそ人間という存在」であることを明らかにした。社会批判の運動は，しばしば運動そのものの絶対化を前提とし，自分の内にあるものを批判の外におきがちであるが，石川は，その狂信性に眼をむけ，「人間がそれによって生きる幻影のさけがたさを認めることによって，自分の思想にあたえる幻影の影響から眼をそらすことがない。」（鶴見俊輔『石川三四指集』解説　近代日本思想大系16，筑摩書房，1976年，p. 460）と言い得るのである。

(3) 藤田省三『天皇制国家の支配原理』（未来社，1966年）p. 186

(4) 石川三四郎『歴史哲学序論』（鈴村書店，1951年）p. 1

(5) 石川　前掲書　p. 1

(6) 石川　前掲書　p. 25
(7) 石田雄「『愚管抄』と『神皇正統記』の歴史思想」(丸山真男編『歴史の思想』筑摩書房，1972年) p. 47
(8) 石川『歴史哲学序論』p. 93
(9), (10), (11) 石川　前掲書　p. 119
(12) 石川『非進化論と人生』p. 6
(13) 石川「病原との闘争」(『歴史哲学序論』) p. 98
(14) 石川　前掲書　p. 56
(15) 橋川文三「歴史意識の問題」(『近代日本思想史講座』第7巻　筑摩書房　1959年　p. 63)
(16) 橋川文三　前掲書　p. 63
(17) 「人間的自然」の全体性回復との視点は，主題は異なるが，池田元氏の分析による「長谷川如是閑の老子論」『長谷川如是閑「国家思想」の研究』(雄山閣，1981年) によるところが大きい。如是閑が老子に託した時代批判・武断国家批判は，石川が第二次大戦中に『東洋文化史百講』の中で示した議論と通じるものがある。
(18) E. Carpenter, Towards Democracy, Labour Prophet, May 1894 (都築忠七訳)
(19) E. Carpenter, My Days and Dreams, p. 65
参照　E. Carpenter, The Healing of Nations and the Hidden Sources of Their Strife, p. 14 "But if the class does not subordinate itself to the general welfare, if it pursues its own ends, usurps governmental power, and dominates the nation for its own uses——if it becomes parasitical, in fact——then it and the nation inevitably become diseaed; as inevitably as the human body becomes diseased when its organs, instead of supplying the body's needs, become the tyrants and parasites of the whole system." また，ホイットマンの『民主主義の展望』1871年に「新思想に鉱脈」を見出していた。
(20) E. Carpenter, Towards Democracy, p. 5
(21) Ibid., p. 6
(22) 参照　拙稿「近代文明批判の地下水脈—石川三四郎とエドワード・カーペンター」(『比較文化研究』25号，1994年)
(23) 高島善哉『アダム・スミスの市民社会体系』(岩波書店，1974年) pp. 11－12
(24) 参照　池上淳『生活の芸術化』丸善　1993年 (ラスキン『ムネラ・プルウェリス』序文13節)
(25) 土方直史『協同思想の形成』(中央大学出版部，1993年) p. 344
(26) 石川『カアペンタア及び其哲学』pp. 110－111
(27) 安永寿延『安藤昌益』(平凡社，1976年) p. 7
(28) 安丸良夫「生活思想における『自然』と『自由』」(『講座日本思想』1　東京大学出版会，1983年) p. 304
(29) 池上淳『生活の芸術化』(丸善　1993年) p. 102
(30) 石川『歴史哲学序論』p. 52

参考文献

石川三四郎『歴史哲学序論』鈴村書店　1951年
『石川三四郎集』(近代日本思想体系16) 筑摩書房　1976年
安永寿延『安藤昌益』平凡社，1976年
二宮裕之「歴史的思考の現在」(岩波講座社会科学の方法Ⅸ)『歴史への問い／歴史からの問い』岩波書店　1993年
『歴史における自然』(シリーズ世界史への問い1) 岩波書店　1989年
Edward, Lewis, Edward Carpenter; An Exposition and an Appreciation 1915

Edward Carpenter, 'England's Ideal', Today, May 1884. Issued as a pamphlet, 1885; reprinted in England's Ideal (1887)

E. Carpenter, The Art of Creation: Essays on the Self and its Powers, London, 1904

E. Carpenter, Towards Democracy. Complete edition in four parts, London, 1905; new ed. 1907